

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 5 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520662

研究課題名(和文) 中・高連携を企図したタスク分析に基づくライティングのシラバス開発

研究課題名(英文) Developing a practical framework for designing a consecutive writing syllabus for junior high and high schools

研究代表者

久保田 章 (KUBOTA, Akira)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：30205132

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、中学校と高校における英作文指導の効果的な連携のためのライティングのシラバスデザインの枠組みを開発することである。この課題について、中学校と高校の英語教科書のライティング課題の分析と中学生と高校生の英作文の比較の2つの観点から考察した。教科書では中・高共に誘導作文の出現率は依然として高くなく、制限作文から自由作文の橋渡しには課題が残っていることがわかった。また、中学生と高校生の英作文の差が特に一貫性の指標に現れることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research is to develop a framework for syllabus design in terms of an effective linkage of English writing instructions between junior high and high schools in Japan. The data was gathered and analyzed from the following two viewpoints: (a) The form and function of writing tasks in junior high and high school authorized English textbooks, (b) Comparisons of essays written by junior high and high school students. The results show that the ratio of guided writing in the textbooks is still not high enough to bridge the gap between controlled writing and essay writing. The difference in coherence of essay writing between the two groups of students was also confirmed through topical structure analysis.

研究分野：教育言語学

キーワード：ライティング タスク 教科書 中高連携 国際情報交換

1. 研究開始当初の背景

(1) 教材開発の基礎となるシラバスデザインの原理としては、教授対象として何を選択するか、それをどのように指導するかという観点から様々なものが提唱されている。1980年代後半から、学習者が目標言語で取り組むべきタスク(課題や作業)が教授対象として注目され、近年はタスク中心の教授法(TBLT)が広く提唱されるようになった。しかしながら、一方では、どのようなタスクをどのような順序で配列すれば言語習得に効果があるのかが必ずしも明確でないという点が、TBLTの課題のひとつと考えられている(Ellis, 2003)。このタスクの構成原理については、一般に「簡単なタスクから難しいタスクへ」、「単純なタスクから複雑なタスクへ」という原則が想定できるが、実際には簡単なタスクとか複雑なタスクという概念は決して自明なものではない。そのためRobinson(2001他)らは、タスクの特性について認知的な観点からの研究を重視している。

(2) 平成14年度に全国の高校3年生約3万人を対象に実施された、教育課程実施状況調査(国立教育政策研究所教育課程研究センター, 2004)によれば、特定のトピックについて、理由を含めて英語で4文以上のまとまりのある文章を書くタイプの問題の通過率(合格率)の平均は、約23%で、設定通過率45%の半分程度に過ぎず、一方で、平均無解答率は、約27%であった。問題のひとつは「来年の春に旅行に行きたいところ」というトピックであったが、文章構成が悪いと評価された解答としては、主語が明示されていない、接続詞が適切に使われていない、日本語で考えた文を逐語的に英語に置き換えている、パラグラフの構成が考慮されていない、複数の文を書くことはできても、内容的に一貫した文章を書けない、などの問題が指摘された。

この傾向は、3年後の平成17年に実施された同様の調査においても観察された。一方、中学校では、旧学習指導要領の下、長年に渡ってリスニングとスピーキングの音声言語が重視されていたこともあり、ライティングの指導は十分に行われてきたとはいいがたい事情がある。実際のところ、平成24年度に国立教育政策研究所教育課程研究センターが全国の中学3年生3300人を対象として実施した「書くこと」に関する調査によれば、中学生は、文と文を適切につなぐことができない、全体としてまとまりのある文章を書けないなどの問題点が指摘されている。

2. 研究の目的

(1)23年度の主な目的は 英国のライティング、シラバス開発、語彙等の研究者と交流し、研究方法やその妥当性などについて情報交換すること、 高校の英語教科書のライティング課題を抽出し、認知的な観点から分析することであった。

(2)24年度は、主に 高校の英語教科書のライティング課題の分析を課題の機能や形式の観点から実施すること、同様に 中学校の英語教科書のライティング課題を分析すること、さらに、中学生と高校生が共にまとまりのある英文が書けないとの指摘があることから、中高それぞれの問題の所在を明確にするため 同一テーマで書かれた中学生と高校生の英作文を、結束性の観点から比較することの3点であった。

(3)25年度は、 24年度と同様の方針でさらに高校と中学校の教科書のライティング課題の分析を継続して実施すること、前年度と同様の問題意識に基づき 中学生と高校生の英作文を一貫性の観点から比較分析することであった。

(4)26年度の目的は、過去3年間の成果をまとめ、報告書を作成することであった。

3. 研究の方法

(1)23 年度には、英国のオックスフォード大学とシェフィールド大学の 2 大学に出張し、各大学の研究者たちにインタビューを行った。さらに、高校の旧課程のライティングの教科書と 2008 年度版の英語 I の教科書からライティングの課題を一部抽出し、Robinson(2001 他)に従って、「タスクの複雑さとタスクの条件」という認知的観点から、その課題を分析・分類した。また、自由作文の課題と、その前後のライティング活動の間の認知的関連性について検討を行った。

(2)24 年度は、ライティング課題の分析方法を見直し、分析の枠組みを認知的な観点ではなく、形式と機能の観点に求め、和文英訳、制限作文、誘導作文、自由作文の 4 種に分類した。また、中学校の教科書と高校のコミュニケーション英語 の教科書を取り上げて、各作文形式の頻度と配列状況について考察した。さらに、中学と高校のライティング指導の連携上の課題を把握し、中学生と高校生の英作文の問題点の異同について考察するため、中学校と高校で同一テーマで書かれた英作文のデータを収集し(各学校約 30 名)、結束性の観点から接続語句の頻度と使用状況について分析した。

(3)25 年度は、24 年度に引き続き中学校の教科書と高校のコミュニケーション英語 の教科書を取り上げて、各作文形式の分類と分析を行った。また、24 年度と同様の中学生と高校生の英作文データを、テキストの一貫性の観点から「話題構造分析」によって分析した。

4. 研究成果

(1)23 年度はオックスフォード大学とシェフィールド大学において応用言語学の研究者たちとの面談やセミナーへの参加を通じて、ライティングのシラバス開発と適切な研究方法について情報交換するとともに、第二言語習得、教材開発、ライティングの理論と実

践指導、コーパス言語学、談話分析等、様々な観点から新しい知見や情報を得た。また、ライティングの課題の認知的な観点からの分析を通じて、個別のライティング・タスクの分類に比べ、関連するタスクが連続する場合には、当該の枠組みを用いて後続するタスクの複雑さや難易度を一律に決定することは非常に困難であることがわかった。換言すれば、Robinson のタスク配列の理論的枠組みは、新規でタスクを開発する場合には首尾よくははめることができると考えられるが、既存のタスク間の関連性を分析する場合は、前後にどのようなタスクが設定されているかによって、それぞれのタスクの複雑さや条件が変化するため単純に同じ理論的枠組みをあてはめてタスクを分類することができないので分析が非常に難しくなる。

(2)形式と機能の観点からライティング・タスクは、制限作文、誘導作文、和文英訳、自由作文の 4 つに分類できる。本研究では、使うべき語句が制限され、文法や語句など「正確さ」の習得に重点があるものを制限作文、内容について指示が与えられ、徐々に自分の言葉で書かせるようにすることが目的であるものを誘導作文と定義する。

文法や語彙の知識は、確かにライティングの基礎的な能力であるが、実際の作文の全体的評価への貢献度は、それほど高くない。したがって、正確さの学習を中心とする制限作文や和文英訳の成果をどのようにして自由作文へとつなげるかが課題となるが、そこで重要な役割を担うのが誘導作文である。誘導作文は、一般に指導上、制限作文・和文英訳と自由作文の間に位置づけられる。誘導作文では、通例書くべき内容が与えられるが、その際学習者は作文に必要な語彙、文法、修辞法などの言語的資源をその中から意識的に入手する必要がある。そして、内容と形式の両方に意識を払わねばならない自由作文に

比べ、そのような援助のおかげで、ある程度の長さの英文を書くことに対する不安を取り除くことができる。それにより作文の難易度が調整され、自由作文に必要な知識と技能を段階的に習得することが可能となると考えられる。さらに言えば、結果的にまとまった文章が出来上がることで、達成感も生まれるようになる。したがってシラバス開発においては、誘導作文をどのように取り入れるかが重要な課題のひとつと言える。

(3) 中学校の教科書 9 冊と高校のコミュニケーション英語 の教科書 7 冊のライティング・タスクを、主に以下の 4 点から分析した。

タスクの量（ライティング課題の数、スピーキング・タスクとの比較など）

タスクの質（課題の種類） タスクの特徴
タスクの配列（前後のタスクとの関係）

タスクについての工夫の有無（まとまりのある文章を書かせるための課題など）

その結果、従来からよく行われてきた和文英訳はほとんどなくなり、代わりに制限作文が文法、語彙などの正確さの指導を担うよう大きな変化があったことがわかった。この傾向は高校でさらに著しいが、特に初期段階では、形式が変わっただけで文単位、ないし語句単位での作文に重点が置かれている傾向に変化はないと言える。一方で誘導作文の出現率は高くなく、制限作文と自由作文をどのようにつなぐかという点については依然として問題が残っていることも判明した。

(4) 中学生と高校生は、ともにまとまりのある英文が書けないという問題が指摘されてきたが、両者が抱える問題が同じなのか、それとも異なるのかについては十分検討されてきたとは言いがたい。そこで本研究では中学生と高校生各 30 名について、「どこに旅行に行きたいか」という同一のテーマで自由作文を実施し、その結果を作文の結束性と一貫性という 2 つの観点から分析した。具体的には、接続詞の使用状況と話題の展開の仕方に

両者の異同が見られるかどうか検討した。結束性については、使用される接続詞の種類と頻度の向上が若干見られるものの、because の誤用など、中学生と高校生の間には質的な相違は見られなかった。一方、一貫性について「主題構造分析」を行った結果、全体としては大きな相違はないものの、高校生では主題を発展させるパターンに多少の多様性が見られ、文章のまとまりに関する両者の意識の差が示唆された。

(5) 学習指導要領でも取り上げられているパラグラフライティングによる基本的なパラグラフ構造の指導とプロセスライティングによる作文の推敲活動の重要性に加え、以上の 2 つの検証を踏まえて、学習者がまとまりのある英文を書く必要性を意識できるようなライティングの活動とシラバス開発について提案を行った。ひとつはストーリーラインを示した上で誘導作文を活用する量を書かせる指導であり、もうひとつは、特定の課題や目標を達成するために書くべき内容と要件（情報の種類（語彙、定型表現、機能表現など）+情報の配列（どのような順序で書けば最も効率よく読み手に伝わるか））が明確に想定される誘導作文の導入である。

<引用文献>

Ellis, R. *Task-based language learning and teaching*, Oxford University Press, 2003, 387.

Robinson, P. Task complexity, cognitive resources, and syllabus design: a triadic framework for examining task influences on SLA, *Cognition and second language instruction*, Cambridge University Press, 2001, 287-318.

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計 2 件)

久保田 章、中学生と高校生の英作文の一貫性について、外国語教育メディア学会関東支部教材教授法研究研修部会、2013 年 12 月 6 日、筑波大学（茨城県つくば市）

久保田 章、中学生と高校生の英作文に見る結束性の問題点、筑波大学教材教授法研究会、2012年7月27日、筑波大学(茨城県つくば市)

〔図書〕(計2件)

久保田 章、筑波大学、中・高連携を企図したタスク分析に基づくライティングのシラバス開発、2015、63

久保田 章 他、協同出版、教科教育の理論と授業 人文編、2012、263-281

6. 研究組織

(1) 研究代表者

久保田 章 (KUBOTA, Akira)
筑波大学・人文社会系・教授
研究者番号：30205132